

# 赤い実

小川未明

青空文庫



だんだん寒さむくなるので、義雄よしおさんのお母かあさんは精せいを出だして、お仕事をしごとをなさっていました。

「きょうのうちに、綿わたをいれてしまいたいものだ。」と、ひとりごとをしながら、針はりを持つ手もてを動かうごかしてられました。

秋あきも深ふかくなって、日脚ひあしは短みじかくなりました。かれこれするうちに、

はや、晩方ばんがたとなりますので、あちらで、豆腐屋とうふやのらっぱの音ねが

きこえると、お母かあさんの心こころは、ますますせいたのでありました。

ちくちくと、縫ぬっていられますうちに、糸いとが短みじかくなって糸いとの先さき

が、針孔みぞからぬけてしまったのです。お母かあさんは、新あたらしい糸いとの先さき

を指ゆびで細ほそくして針はりの孔あなにとおそうとなさいました。けれど、うま

いぐあいには、糸いとは孔あなにとおらなかつたのです。

お母かあさんは、氣きをおもみになりました。そして、明あかるい方ほうを向むいて、針はりのちい小さな孔あなをすかすようにして、糸いとの先さきをいれようとして、

ましたが、やはりうまくいきませんでした。

「義雄よしおさん。」と、お母かあさんはたまりかねて、隣となりのへやで、勉べんき

強ようをしていた義雄よしおさんをお呼よびになりました。

「なんですか、お母かあさん。」と、義雄よしおさんは、すぐにやってきま

した。

「お母かあさんは、目めがわるくなつて、とおらないから、ちよつと糸いとを針孔みぞにとおしておくれ。」と、おつしやいました。

これをきくと、義雄よしおさんは急きゆうに胸むねがふさがつて、悲かなしくなりま

した。

「お母<sup>かあ</sup>さんは、まだおばあさんじゃないんでしょう。」と、義雄<sup>よしお</sup>さんはききました。

「いいえ、もうおばあさんなんですよ。」

こうおつしやつたお母<sup>かあ</sup>さんの言葉<sup>ことば</sup>に、やさしい義雄<sup>よしお</sup>さんは、目<sup>め</sup>の中に、熱<sup>あつ</sup>い涙<sup>なみだ</sup>がわいてきました。糸<sup>いと</sup>をとおしてあげて、ふと、庭<sup>にわ</sup>さきを見ると赤<sup>あか</sup>いものが、目<sup>め</sup>にとまったのです。

「あの、赤<sup>あか</sup>いのはなんだろうな。お母<sup>かあ</sup>さん、あの赤<sup>あか</sup>いのはなんでしようね。」

「どれですか。」

「ざくろの木<sup>き</sup>の、あの枝<sup>えだ</sup>さきについている……。」

すでに、黄色きいろくなつた葉はが落ちおてしまつて、ざくろの木きは枝えだばかりになつていました。その一本ほんの枝えだのさきに、小さい真まつ赤かなものものが、ついていたのです。そして、それはなんであるか、お母かあさんにもわかりませんでした。

義雄よしおさんは、庭にわに下おりて、すぐにざくろの木きに登のぼりはじめました。

「おちるといけませんよ。」と、お母かあさんは、注意ちゅういをなさいました。

「だいじょうぶです。」と、義雄よしおさんは、もう木きの中なかほどまで登のぼつてその枝えだに、足あしをかけていました。

近ちかづいてみると、ちようどルビーのように、美うつくしくすきとおる、

なにかの小さい実が、ぎくろのとげにつきさされていたのでした。  
 「どうして、こんなところに赤い実がつきさされているのだろう

」  
 義雄よしおさんは、赤い実をとげからぬき取って、木きから下おりると、  
 お母かあさんのところへ持もってまいりました。

すると、お母かあさんは、  
 「うぐいすか、なにかそんなような鳥とりが、どこからか、くわえて  
 きてさしていったのです。」とおっしゃいました。

「どうして、あんなところにさしておいたんでしょうね。」  
 「あとから、こつちへとんでくるお友ともだちに知しらせる目印めじるしにし  
 たのかもしれないね。それでなければ、あまり赤あかくてきれいな

実だから、食べるのが惜しくてしまっただけかもしれない。そして、そのうちに忘れてしまっただけでしょう。」と、お母さんはおっしゃいました。義雄さんは、なんだかそのうぐいすがなつかしい気がしました。

「お母さん、きつと、惜しくてたべなかつたんですよ。」

「ああ、そうかもしれない。」

美しい、赤い実を掌の上にのせて、ながめていた義雄さんは、なんの実だろうかと思いました。

「お母さん、木の実にしようか、草の実にしようか？」と、ききました。

「やぶの中に生えている、なにかの木の実のようですね。」



「これを土つちにうずめておくと、芽めが出るでしょうか。」と、義雄よしおさんは、たずねました。

「ええ、出でますとも、みんな草くさや、木きの実みは下したに落おちてそこだけに、芽めを出だすものではありません。こうして、鳥とりにたべられて、その鳥とりが、遠方えんぼうに飛とんでいって、ふんをすると種たね子が、その中なかにはいつていて、芽めを出だすこともあるのです。そして、その芽めがおお大きく伸のびて、一本ほんの木きとなった時分じぶんには、その木きの親木おやきは、もう、枯かれていることもあります。またじょうぶでいることもあります。そんなことが、たび重かさなるにつれて、その木きの子こや、孫まごが地面じめんじょう上に殖ふえていって繁榮はんえいするのです。」と、お母かあさんは、おっしやいました。

「かんが  
考えると、不思議なもんですね。」

「それだから、美しい実のなるのも、木には、深い意味があるの  
で、自分の種類を保存することになるのです。」

「人間は、どうなんですか。」

「どう、おまえは考えるの。お父さんや、お母さんは、だんだん  
年をとつて、働くことができなくなります。その時分には、おま  
えたちは大きくなつて世の中のためにつくし、また、家のために  
ちから  
力とならなければならぬ。そして、私たちの力でできなかつた  
ことをもやりとげなければならぬのです。」とおっしゃいました。

義雄さんは、お母さんのお話をきくと、いつそう、赤い実がな

つかしくなりました。その赤い実を、またぎくろの木にさしてお  
こうかとも思ったが、それよりは、お庭の日当たりのいいやわら  
かな土つちにうずめてやったほうがいいと思つて、そうしました。  
義雄よしおさんには、将しょうらい来の楽たのしみが一つできました。来年らいねんの  
芽めの出る春はるが待またれたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「赤《あか》い実《み》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 赤い実

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>